

保育講演会レポート

テーマ「お話がうまれるとき」

ーわにわにの誕生などー

講師：作家 小風 さち先生



2015年11月10日(火) / 参加者 68名

今回、講師をしてくださった小風さち先生は、6月に講演くださった松居和先生の妹さんです。お兄さんの松居先生とは対照的なおっとりした優しい雰囲気をお持ちの方でした。その優しい人柄の先生から「お話がうまれるとき」について、ご自身の作品の読み聞かせを交えながらお話をうかがいました。

講演内容

赤ちゃんは「言葉」を食べる…

赤ちゃんの絵本『ぶーぶーぶー』は、赤や青、黄色、緑色の車が登場するお話です。

赤ちゃんは、言葉を理解することができない。赤ちゃんは言葉を食べるのです。

言葉に触れて、言葉を見て、遊んで食べていきます。

「言葉」は食べ物と同じで余計な合成甘味料・着色料が入っていない、美しいものであるべきです。多すぎても少なすぎてもいけません。

そんな言葉を大切に作って作った絵本です。

『ぶーぶーぶー』の絵を描いてくださったのはファブリックデザイナーの脇阪さんですが、脇阪さんのデザインしたものが、以前3歳の息子のために買ったカラフルな車の模様のペーパーナプキンと同じものだったと知り、その当時の母親だった時を思い起こして作りました。

「絵本」は作り手の思いだけではなく、読む人の声や温もりを感じることができます。

『わにわにのおふろ』ができるまで

赤ちゃん絵本から年中向きになると、言葉がだんだん多くなってきます。

お話は机の上だけで作られるのではなく、本物に出会い、音を聞いたりして作られます。

「石神井公園にワニが出た」「バナナワニ園のワニの引越し」などニュースでワニの話題を目にすることがあり、私は実際にバナナワニ園を訪れました。

その当時、子どもが小学校2年生・3年生で、子どもたちが学校から何か問題を抱えて帰ってきて、母親としてのキャパシティをこえてしまっていて何もしてあげられませんでした。

そんな時、子どもたちと一緒にお風呂に入り抱きしめることで、お互いの気持ちがほぐれていくのを感じました。

その時、今、お風呂にワニが入ってきたら？と想像して、お話が降ってきたのです。

お話をつくるにあたって“リアリティー”を大切にしています。

お話の世界と現実の世界をつなぐリアリティーという橋が立派で丈夫なものであれば、子どもたちは安心してお話の世界と現実の世界を行き来し、楽しみながらその貴重な経験を積むことができます。

そのためには、自分の目で見て、自分の足で歩いて実際に知り体験し作品を作り上げていくことが大切であり、それ故に、リアリティーのある絵本を誕生させることができます。

『わにわにのおふろ』の絵本を一緒に手掛けた、版画家の先生にもワニを擬人化することなく描いて欲しいという思いから、実際にバナナワニ園にワニを見に行ってもらい、そこからあのリアリティーあふれる絵本が出来上がりました。

自分の気持ちにあふれていた最初の原稿～リアリティーへ

『とべ！ちいさなプロペラき』は、空港で見た大きな飛行機の列に並び飛び立っていく小さなプロペラ機から生まれたお話です。このお話は最初、自身の思いが溢れていたものですが、自分の気持ちを書くことと、主人公の気持ちを書くことは別のものであることを知りました。実際に観て観察し、音はどうか等実際に「プロペラ機」というものを知り、学ぶことが必要だということ。リアリティーを大切にする原点がここに 있습니다。

平和を伝える

『はしれ きかんしゃ ちからあし』は、戦争やその時代を伝えていくために手掛けられた絵本です。私は、戦争を体験していなく、最初、作品をつくることに抵抗がありましたが、実際にアウシュビッツに足を運んだ時、「戦争を知らない」では通用しない“現実”“世界”がそこにあり、伝えなくてはならないと強く感じました。戦争と平和を繰り返す人類・戦争そのものについて、絵本を通じて子どもたちに伝えたいと思います。

今、子どもたちの周りには i pad・スマートフォン・DVD など、手軽に見て触れて情報を得る環境があふれています。しかし、「絵本」・「本」の世界から絵・文字に触れ、リアリティーという橋を渡りお話の世界へ冒険し、知識を得る経験が大切なのではないのでしょうか？橋を渡った経験のある子は覚えています。多くなくても良いのです。立派で丈夫な橋を渡る経験をさせてあげてください。

文責 もみじ組広報

秋元 開未	飯田 英子
石川 輝美	杉野 麻子
長嶋美也子	高橋 佳奈



小風先生の読み聞かせ

お母さんと一緒に参加した小さい子どもたちもよくみていました…



講演会に参加された方から…

ひまわり赤 若林紀子

子どもたちが大好きな「わにわにシリーズ」の作者、小風さち先生が講演会にいらしてくださいまして、ということでもとても楽しみにしていました。

特に印象に残ったことは①赤ちゃんはことばを食べる、②絵本はリアルである必要はないがリアリティーは必要、③リアリティーのある絵本とは、物語の世界と現実とを何度でも渡って歩ける頑丈な橋を持っている絵本でした。この3項目を満たした絵本の橋を渡った足を持つ子どもは豊かな感性を持つのだなと思いました。

これからも絵本を通じて豊かな親子の時間をもちたいと思います。

ひまわり赤 久田富士子

「言葉は食べものです」という先生の第一声が日々、どんな本を読んであげようか…と私にとってはとても印象に残るものでした。年齢に応じて言葉の数も与えすぎてもいけないし与えなさすぎてもいけない、生き活きとした栄養になるような言葉を選べば良いと、言葉や文章というものは食べものと同じくらい人間の生活になくてはならない大切なものなのだと思います。息子の好きな飛行機の本「とべ、ちいさいプロペラき」をプレゼントしたら、何度も何度も読んでくれて「プルン プルン」の部分はとても力がこもっていました。

絵本はおとなが読んで時々に元気をもらえたり、考えさせられたりと本の原点で誰が読んで良い栄養たっぷりの食べものに思えました。

これからも息子と一緒にたくさん読んでいきたいと思いました。

ひまわり白 佐藤祐子

ひとつひとつ、言葉を選びながらお話しするさち先生の姿に、丁寧に絵本を作られている姿が見えるようでした。言葉は食べ物、余計なものは入れず、多過ぎてても少な過ぎててもよくないというのが印象的であり、また、とても納得しました。子どもへの言葉遣いや声掛けも全く同じ。これからも気をつけていきたいです。赤ちゃんのために何人もの大人が一生懸命になるのは本当に見ていて幸せ、と目を細める姿に、タイプは全く違うけれど、松居和先生との共通点を見つけたようで、本当にすてきなご兄妹だなと思いました。

お話を作ったご本人から読み聞かせをしていただけるなんて、とても贅沢な時間をいただきました。ありがとうございました！

ひまわり赤 伴佳代

「ワニワニ」我が子も大好きな絵本です。その作者の小風先生から「ワニワニ」が出来るまでの貴重なお話を伺えて、また先生の優しい話し方に癒しを与えて頂いてた講演会でした。

我が家は上の子が小6小2のお兄ちゃんがありますが、いまだに寝る前に読み聞かせをしています。それは聞かせるから、寝る前に親子が寄り添える大事な時間にもなっています。小風先生の作品に対するリアリティーへの追求やメッセージを再度思い浮かべながら子どもたちと再度読み直してみようと思います。

もみじ赤 川崎聖恵

わにわにシリーズなど、子どもたちが大好きだった絵本の制作エピソードを知ることができて、とても楽しかったです。「ことばはたべもの」というお話が印象的でした。うちの子どもたちは、まだまだ食べ盛り(?)なので、豊かでうつくしい言葉を食べさせたいと思いました。すてきな講演会をありがとうございました。

もみじ赤

小風先生が入ってきた瞬間からその世界はふわっと優しくなり空気が変わったようでした。「赤ちゃんはことばを食べる」という一言がとても印象的でした。あらためて絵本、本の大切さ、読み聞かせを行うということを中心に心がけていきたいなと思いました。この度はこのような機会を作ってくださいました。幼稚園の先生方ありがとうございました。

もみじ白 伴慶子

たくさんわくわくどきどきが詰まっている絵本。作家先生のお話を聞ける貴重な機会を楽しみにしていました。わにわにシリーズのわにわにバナナワニ園からやって来たわにだと知って絵本を読むと、無骨なわにわににさらに愛着が湧き、何とも言い難い気持ちになります。これまで小風先生の飽く無き探求心に導かれて楽しい絵本の時間を過ごして来たことを知ることができました。

もみじ白 杉野麻子

私たちが何気なく手にしていた1冊の絵本には、作り手となられる方々の並々ならぬ覚悟や信念、使命感という想像以上の思いが込められていることを改めて知りました。今まで自分は子どもに読み聞かせながら、絵本の表面的な部分しか見ていなかった気がします。これからは子どもに向けて絵本を読むという立場ではなく、一緒になって絵本の世界を楽しみたいと思います。

もみじ白 菅野美嘉

子供達がわにわにシリーズの絵本を何度も繰り返し、一緒に読む理由が今よくわかりました。主人公のわにとモデルのワニがそっくりでびっくりしました。これからも子供達と絵本の世界を楽しみたいです。

もみじ白 長嶋美也子

お話ができるまでという興味深いお話をうかがうことができたこと、お話の世界に冒険する経験の大切さをあらためて気付かせていただけたことに感謝です。また、しばらく絵本の読み聞かせをしてあげていなかった自分に反省です。早速、息子の好きな本を読んで一緒に冒険したいと思います。

もみじ白 黒澤聡子

1冊の絵本が出来上がるまでに、あれ程多くの時間や先生のリアリティーを追求する強いお気持ちがこめられているなんて…！驚きと感激の連続でした。子どもが頑丈な橋を渡るように、素敵な絵本に沢山出逢えるように、これからも絵本の時間を大切にしていきたいと思いました。心癒される素晴らしい講演会をありがとうございました。

もみじ白 内藤玲子

先生の穏やかでナチュラルな雰囲気印象的でした。お話作りに対する思いがよく伝わってきて、日頃何気なく読んでいる絵本でしたが、ゆっくり時間をかけて丁寧に読んであげたいと思いました。又、見たり聞いたりする経験はとても大事だとあらためて思いました。

つくし赤 岩瀬奈穂美

いくつもの糸がまとまった時、スーッと物語が降りてくる。言葉のプロは沢山のキラキラした言葉で、子育ての話を交えながら絵本が出来るまでのプロセスをお話して下さいました。これからも大切に絵本を読んでいきたいと思えます。

つくし白 沼尻紀子

子供達が大好きな「わにわに」がどのように生まれたのかを知ることができました。さち先生が「自分の目で見て自分の足で歩くこと」を、文章を書かれる時に大切になさっていることでリアリティーのある本が生まれていくのだと知りました。日々の生活に追われて、なかなか子供に絵本を読んでもあげる時間が減っていましたが、先生のお話を聞いて「子供が何度も渡って冒険して帰ってくる」そんな絵本をもっともっと読んであげたいなと思いました。

つくし赤 渡辺理香

小風さち先生の柔らかなお声は、耳にとっても心地よく、ほっとリラックスできるひとときを過ごさせて頂きました。

わにわにの絵本はもちろん知っていましたが、自分の子供のために購入することはしていませんでした。それは、わにわにの絵がリアルで、子供が見ると怖がってしまうのではないかと、子供はかわいいキャラクター物が好きだろうという勝手な自分の思い込みからでした。でも先生の「リアリティーがとても大事。リアリティーがあれば、子供は本の世界と自分の世界に頑丈な橋を架けて、いつでも行き来できる。そして大人になっても忘れない。」という言葉に「はっ」と気づかされました。読者は親ではない。子供なのだ。事実、子供はわにわにの絵本をとてても気に入る、本に自分のなまえがサインされている事をよるこび、お話を一語一語声にだして読んでいました。

先生のお話しが心に響くのは、手ごわい読者を相手に日々リアリティーの追及に向けて努力されているからなのでしょう。自分も先生には遠くおよびませんが、まずは忙しいことを言い訳にせず、子供をひざに抱えて絵本を読む時間を作る「ちっちゃい努力」から始めてみようと思いました。このような機会を与えてくださった事に感謝いたします。

つくし白 村上美夏

小風先生の独特の世界観から生まれてきた絵本にまつわるお話を聞けてとても楽しかったです。描かれている絵や色づかい、使われている言葉を味わいながら子供達と絵本を読む時間を大切にしていきたいと思えます。

チューリップ・もも 福馬麻子

母になり10年以上が経った今、懐かしい絵本に出会うと、幼い頃の自分よりむしろ初めてその絵本を読み聞かせた時の子どもの輝く様な顔が目の前に浮かびます。

そのように思い出の大切な鍵となる物語ですが、ひとつひとつのお話がリアリティーという頑丈な橋を掛けられ安心して行き来できるようにと祈りの込められた冒険の世界であったなら、絵本にまつわる情景に色褪せない特別の温かみを感じる訳が理解できます。

小風先生が真摯に丁寧に語りかける穏やかな優しい講演会に出席して、絵本を生み出す想いに感動し、感性が千差万別である事に想いを巡らせ楽しい気持ちになりました。ありがとうございました。

チューリップ・きく 常盤佐知子

作家さんのお話をお聞きするのは、初めての事だったので、とても興味深く拝聴しました。

1つの物語には、表に出てこないもう1つの物語があり、そんな素敵な(大変な)創作過程をお聞きすることが出来て、とても楽しい時間となりました。

途中で、小風先生の読み聞かせがありましたが、その時は赤ちゃん達も聞き耳を立てている事が分かり、講演会の話と絵本の話の違いを感じ取っていてすごいと思いました。

毎日をバタバタと惰性で生活している私にとって、ゆったりと丁寧に生活を過ごされている小風先生のお話を聞く機会に恵まれた事に感謝致します。ありがとうございました